

ゆい
結 通 信

災害に学ぶ

牧野直子

西日本を襲った7月の豪雨

今まで経験したことのない凄まじい豪雨は西日本の広い範囲に甚大な被害をもたらしました。犠牲になられた方々のご冥福をお祈りすると同時に、被災された皆様に一日も早く平穏な暮らしが戻ることを願わずにはおられません。

大阪北部地震と豪雨災害に見舞われて

6月18日朝、箕面市は思いがけない震度6の地震に見舞われました。結みのおの事務所は少し物が落ちたり、食器が割れたりしましたが、大きな被害はありませんでした。ところが、同じ箕面市内でも土地や家の条件によっては、屋根瓦が落ちたり、家具が倒れたりしたようです。朝、登校時に乗ったエレベーターにたった一人、閉じ込められた小学生がいたと聞きました。救出されるまでの3時間、どんなに心細い思いをしたことでしょうか。

そのショックが覚めやらないうちに豪雨に見舞われました。地震で緩んだ地盤に土砂災害の恐れもあり、箕面市内でも広く「避難勧告」「避難指示」が出されましたが、避難指示が発令されたことも知らない方が多かったのではないのでしょうか？果たしてどれだけの市民がどのような行動をとったのか気になるところです。

超高齢社会と災害

昨年の九州北部豪雨からちょうど1年後に今度は私たちが豪雨に見舞われ、その怖さを実感しました。スマホの緊急配信音が鳴り響く度にドキドキしました。きっとおひとり暮らしの高齢の方はさぞ不安な思いをされたことでしょうか。超高齢社会での災害対応については考えさせられることが沢山ありました。

地震発生後、社協は災害ボランティアセンターをすぐに立ち上げました。家具の後始末や後片付けボランティアの存在はどんなに頼りにされたことでしょうか。今回の地震と豪雨という二重の自然災害を振り返り、まず一人ひとりがすべきこと、地域住民としてできること、また行政や組織としてすべきことを再確認するチャンスではないで

しょうか。そして議会はこういう時こそ市民の現場の声を聴きながら、市政に積極的に具体的な提案をしてほしいものです。

普段からの備えはできていたか？

1月17日には防災訓練の一つとして「家の前に黄色い布を掲げる」訓練をしていたにも関わらず、今回の地震では私もまったくそのことは意識にもありませんでした。訓練のときにできても、現実には被災したときに生かされないという意味がありません。それでも民生委員さんは自発的に担当地域のおひとり暮らしの方の安否確認に走り回っておられたようです。きっとその声かけに多くの方がほっとされたことでしょうか。

また、電気やガス、水道などのライフラインがストップした家庭も沢山ありました。そしてスーパーではペットボトルの水やカップラーメンが品切れ状態になったと聞きます。日頃からの備えが繰り返し言われていても、常備していない人が結構おられるということでしょうか。

私は阪神大震災を経験してから、外出時には必ず水の入ったペットボトルと軍手と緊急呼子笛を携帯しています。災害は時を選ばずやってきます。いつものように家を出てもいつものように帰ってこられるとは限らないのです。そしてそういうリスクは増えることはあっても減ることはないでしょう。

何より大切な助け合いの心

一人ひとりの心構えと隣近所の協力がなければ、災害時の危機を乗り越えることは難しいと思います。そしてご近所の助け合いは急にはできません。日頃のお付き合いがあまりなくても、いざという時には肩を寄せ合ってしのぐということもあるのではないのでしょうか。そういうときにこそ「結みのお」のネットワークと「結みのお」で育んだ「分ち合い、育ち合い、助け合い」の力が発揮できるようにしたいものです。今回のことを教訓に、「結みのお」でも、いざというときにどういことができるのか、今後の課題として話し合っていきたいと思います。